

平成27年度 鳥取中央育英高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

鳥取中央育英高校は、前身の私立「育英賢」創始者・豊田太蔵の志を受け継いだ校訓「克己」を指導の根幹とし、地域との連携を積極的に図りながら、「克己の徳を備えた人間力豊かな生徒の育成」を目指し、学校長のリーダーシップのもと、教職員が連携して教育活動にあたっている。特に地方の活性化が求められる今日において、「地域に貢献する人材の育成」は、地域と共に歩み、地域の期待を受けて多くの有為な人材を輩出してきた本校の歴史を鑑みるに、これからますます重要になってくる地方振興の担い手づくりとして期待される。

入学してくる生徒や保護者の要望や意識の変化に細かく対応しようと、指導にあたる教職員はさまざまな指導の工夫を行っており、一定の成果を上げている。今後は、教育課題と指導方法を明確にし、全教職員の共通実践によって指導の充実を図っていくことを望みたい。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 校訓「克己」に基づいた教育目標を掲げ、一貫した教育方針のもとで教育活動を行っており、その姿勢は微塵の揺るぎもない。今後もこの方針を貫き、さらなる実践を重ねて成果を上げるとともに、確信を持って学内外に強く発信していただきたい。
- ② 「地域探究の時間」の取組は、地域のリーダーとして活躍できる人材の育成と活動の基となる人格の形成を目指すには有効な教育活動である。地域との連携を密にとり、学力の向上を図るための視点を活動の中に取り入れながら、深化発展させていただきたい。
- ③ 平成23年度評価書にもあるように、部活動への生徒の関心と期待が大きく、加入率の高さに見て取れる。これまでの伝統を受け継ぎながら、全国大会で活躍する部活動も数多く存在する。運動部・文化部とも、指導者がより指導力を発揮できるように教育環境を整え、学校全体で支合い気運を盛り上げながら、さらなる活性化を目指していただきたい。
- ④ 生徒や保護者の多様な要望や意識の変化に対応するために、教育課程や教育活動にさまざまな工夫を行っており、成果を上げつつある。生徒の自主的な取組による大運動会の実施・実力診断テストによる一人ひとりの興味や学力にあった指導・生徒のわずかな変化を見逃さない生徒指導体制などは、さらに指導を充実させていただきたい。
- ⑤ 体育コースの指導は、スポーツの技量だけでなく、全人格的な面の向上を図る指導も充実している。このノウハウを、全校の指導体制に還元していただきたい。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 教職員個々の努力にもかかわらず、学力向上が十分に達成できているとはいえない実態がある。まず、生徒による授業アンケートの内容・実施時期・分析方法などの改善を行って実施し、出てきた課題や要望の検討を行って対応策を立てる必要がある。そして、教職員の指導の力量を高めるために、学校挙げて授業改革の研究体制を組んで、研究テーマの統一と教科の枠を超えた共通実践と検証が行えるようにすべきである。
- ② 学校課題に向けたさまざまな取組は、成果が期待される一方で、教職員の多忙感につながったり、特定の教職員の過重負担になってしまったりするところがある。生徒への関わりを中心にした教育活動を行うという基本的な考え方を大事にしなが、重複した教育活動の精選を行うとともに、全教職員が関わる体制づくりと時間確保・心のケアの検討が必要である。
- ③ 生徒一人ひとりの希望や興味、学力に対応した細かい進路指導が行われているが、生徒の潜在的な能力を引き出し高めていく中で、夢を実現させていく進路決定になっているのか、結果を見る限りでははっきりしない。学力向上を保証する授業を提供するとともに、より高い目標に向かって努力し、進路を実現させていく指導が望まれる。
- ④ 学校環境の点検整備が必要である。教室環境の整備には、生徒の自覚と「5S」（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）の徹底のための組織的な取組が必要であり、また、安全点検の方法の見直しも必要である。
- ⑤ 学校関係者評価委員は年齢構成に偏りがあり、また、教職員経験者も多い。社会の幅広い意見を聞くためには、年齢の若い方、教職員経験者以外の方も選定する必要がある。